



voice

卒業生の声

当時小学6年生 T・Yさん



熊町小学校という建物をのこす意味については、私という一人の人間の中にさえ、さまざまな立場があります。今回、一人の卒業生という立場から伝えられることとして、これらの写真を選びました。大きな出来事の中では小さな出来事が埋もれてしまいがちです。私は母校に行くと懐かしい気持ちになります。懐かしい気持ちになれる場所が、これからもあるといいなと素朴に思います。





大好きな学び舎。私がこの
学校で過ごせたのは4年生
のあの日まで。まだ使うはず
だったランドセル、体操着、
運動靴たちは思い出とともに
にあの日と同じ学校の中で
今でも私たちを待っていて
いる。楽しかった思い出。
果たせなかった約束。大人
になった私たち。何も変わら
ない校舎。でも今、また、
ここから、一緒に。

voice

卒業生の声

当時小学4年生 E・Rさん



ここ集合！

voice

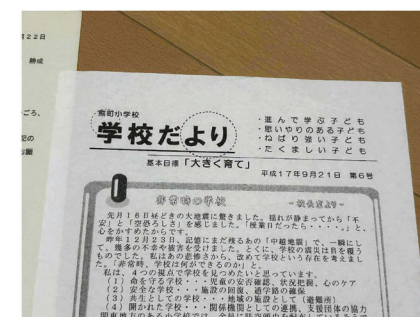
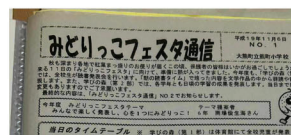
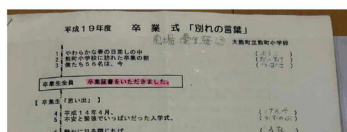
卒業生の声

当時小学4年生 S・Hさん



震度6強の地震から崩れずに
根を張りつづけてくれた
何年経っても私たちの帰りを
待ちつづけてくれた
お父さんでありお母さんでもある
大好きな熊町小学校
またみんなが集まれる場所でありますように、
みんなー！ここ集合！





母校だから。私が今、大熊町に帰ってきて、幸々に大熊ライフを送れているのは、熊町小学校に当時いた先生や児童、関係者を含め、熊町小学校の校舎や熊町城、校庭のアスレチックなどの様々な環境要因が、私という人間の基礎を育んでくれたおかげだと思っている。だからこそ、お世話になった場所が無くなってしまうと思うのは私にとつては自然な感情なのである。

もちろん建物を残すにあたり、ランニングコストや修理費用はかかる。震災遺構として残すにしても、簡単にだれでも見に行ける場所ではない、などの複合的に重なる問題が残っているのも事実だ。この文章を見直しても「自分の母校だから無くなってしまう」という町民一人のエゴでしかないのも自覚している。こんなエゴのような内容を書いたら多くの人に批判されるだろうし、今までもいろんなところで「熊小が残ってほしい」と素直な気持ちを吐き出すに、たびたびその思いを打ち碎かれそうなくらいにハードルが高いことを述べているのだと思知らされてきた。

それでも残るかもしれないという可能性があるなら、批判的な意見を浴びせられる逆境のような状況は苦しいけれど、「熊町小学校が残ってほしい」という自分の気持ちに蓋をせず、その可能性を探る努力はしたいと思った。そのために、大熊町の未来の町民の方々の負担には絶対にしたくないし、「熊町小学校を先人たちが残してくれたよかった」と、思えるような場所として未来につなきたい。